

幻覚&妄想大会は町の名物行事

北海道「浦河べてるの家」を訪ねて

私達は札幌で開かれた社会教育全国集会の参加を兼ね、統合失調症の人達が町おこしをしたという「浦河べてるの家」を訪ねた。バスをおりた所は襟裳岬に程近い人口1万6千人の小さな町で、人通りも少なくひっそりとしていた。

今から30年前、過疎化の進んだ浦河町で、精神障害を抱えた若者が「町の為に出来る事はないか」と考え、日高昆布の産地直送で起業した。今では介護用品を中心とした会社も起こし高齢化の進む町で地域の活動拠点となっている。

「べてるの理念」

最近では「べてる」での防災の取り組みをタイのプーケットで報告する等活動も国際的だ。又、入所希望者も多く数十人が登録待ちだという。

「べてるの家」の最大の特徴は、人間関係や社会生活における対処法を身につける為、ミーティングによって話

し合う力を育てている事だ。「三度の飯よりミーティング」という理念があり、一ヶ月に100回以上行われているという。昆布作業中も「手を動かすより口を動かせ」という合言葉がある程だ。

統合失調症の症状である「幻聴・妄想」も薬の力で封じ込めようとせず「幻聴さん」と呼んで皆の前でありのままを話す。年1回の「幻覚&妄想大会」は町の名物行事となっている。

三度の飯よりミーティング

もう一つの特徴は、自らが「研究者」となって自分の抱える問題を語り、仲間への応援を得ながら対処法を考えていくという「当事者研究」である。訪ねた日がちょうどその日に当たると言う事で見学する事にした。

その雰囲気は明るく、発言もユニークで皆積極的だ。この活動も講演会等で紹介され各地に広がってきている。

7年前に発病したという青年に「共同住居」を案内してもらいながら話を聞いた。

彼は早稲田大学を卒業後、父親の意見で会計士になったが余りの忙しさの中で行き場を失い発病した。「此処へ来る迄母親べつたりだった。その母親が癌になり見てもらえなくなったので2ヶ月前に入所した。家に居る時は、爆発を起こし壁は穴だらけだった。ただ此処はボオツとする時間がある。今は居場所がありほっとしている」と語った。

又、以前千葉に住んでいたという青年に会った。「浦河は嫌だ。千葉に帰りた。兄に連絡してるが返事がない」という。何とも切ない気持ちになる。

「べてる」に戻ると各自がその日の労働時間を報告し合っていた。此処は自分の体調に合わせて労働時間を決める。残業も自由で、報告後2人の女性が黙々と手作りのバックに刺繍をしていたのが印象に残っている。

今回の訪問で私は、玄関に足を踏み入れた瞬間、胸が一杯になった。私の息子も同じ障害をもっているからだ。今は落ち着き本来の自分を取り戻しつつあるが、こんなに多くの障害者を目の当たりにするとやはりショックだった。

この人達は日々どういう思いで過ごしているんだろう。それぞれ生きてきた中で悩み苦しみ、精神病と診断され、孤独感の中で辛い入院生活を送り、退院すれば家族・地域の中で疎外感に苦しんだ彼らには、やっとなり着いた安住の居場所なのだろう。

私は「べてる」に来て今後の息子との付き合い方に多くのヒントをもらった。

「べてるの人達」は人間らしく生きる為「べてる流」に自分自身の力を見いだそうとしている。私も傾聴の学びの中で多くの力を得た。

学び続けて来て良かったと心から思えた。



「べてるの家」を訪問した私たち